



第7章・結 論

以上、国内外の様々な島興しを、行政、民間両面から多角的に事例紹介を行ってきた。本章では、まず県内でも地域振興を標榜し活躍されている3人のリーダーを紹介、最後にこの4ヶ月間で学んだ事柄をベースに、「今後の離島振興に必要なこと」を課内で取り纏めた。

1. 頑張る鹿児島島の経営者たち

1) 官民連携方式；『開運の郷構想』 - 奄美大島開運酒造 渡 博文社長に学ぶ

メディアへにも頻繁に登場されるためご存じの方も多いだろうが、(株)奄美大島開運酒造の渡博文社長(68歳；大島郡宇検村御出身)は、黒糖焼酎「れんと」の製造・販売を中心として、奄美大島からの情報発信に熱心に取り組んでいる。

昭和40年代の新婚旅行ブーム時に奄美観光ホテルを開業、以来ホテル業を通して観光振興・離島振興を考えてこられた渡社長は、地元農業の活性化・焼酎を通じた島からの情報発信を目的に、平成8年から地元で生産したサトウキビを使った黒糖焼酎の製造に乗り出した。主力銘柄「れんと」は、音響熟成と、女性社長の登用、そして女性にも好まれるボトルデザインが好評を博し、順調に販売量を伸ばしているという。特に東京、大阪を含めて全国的に裾野が広がっていることから、渡社長の唱える「焼酎を通じた情報発信」も、着実に成果を生みつつある。また環境対策として、焼酎業界で課題とされている廃液処理にも着手、廃液に含まれるクエン酸等を使った健康飲料の販売にも本格的に乗り出している。

現在渡社長は、次なる奄美大島の振興策として、長期滞在型施設「開運の郷」の構想を進めている。開運酒造の工場がある宇検村は、65歳以上の人口割合が36.3%(平成12年国勢調査ベース)と、奄美群島の中でも最も高齢者の割合の高い自治体である。そこから生まれる「長寿・健康」のイメージを活かして、自然に囲まれた宇検村の中で、可能な限り「自給自足」に近い生活を通して健康作りをしよう、というコンセプトである。

平成12年に名瀬市が奄美出身者に行ったアンケートによれば、「将来は奄美に戻ってきて住みたい」と答えた人が全体の37%(「住みたくない」は19%)で、その理由として、「リタイア後はふるさとで過ごしたい」(43%)、「自然環境がよい」(24%)が上位に挙げられている。単なるリゾート施設を作ろうとするのではなく、高齢者が余生を過ごす、奄美出身者が地元の資源を使って健康作りをする、という渡社長の発想は、奄美出身者の潜在的ニーズを的確に捉えたものということ



『開運の郷』事業予定地



ができる。

また、上記焼酎をモチーフにした情報発信にとどまらず、この『開運の郷』プロジェクトについても、宇検村役場が全面的にバックアップを行っており、今年度中に取りまとめ予定の向こう 10 年間の長期計画の中にも、同計画の推進を盛り込んでいくとのことであった。

黒糖焼酎、廃液処理についても同様のことが伺えたが、宇検村の場合は、「民間と行政の連携」がうまく作用して、地元ニーズにマッチした村興し（島興し）が行われているとの印象を持った。

宇検村の元山三郎村長の言葉を借りれば、「民間の主導によって行政のサービスが早められているのが宇検村。開運の郷構想は、その最もよい事例」とのこと。「宇検村のレスポンスは、これまで経験した行政との連携の中でも最も早く的確である。これは、われわれ民間経営者にとって最も有りたく、大事なこと。長期的な視点に立って、奄振事業が打ち切られても自立自興できるような村、そして島にしていきたい」と語る渡社長の今後の活動に注目していきたい。

2) 民間主導方式 ; 「ばしゃ山」奥社長、「サンセットリゾート」宮田社長に学ぶ

奄美大島笠利町にて、リゾートホテル「ばしゃ山村」を経営する奥篤次社長は、行政に頼らない島興しを進める、アイデアの豊富な方である。

「リゾートホテル」とは言っても、ばしゃ山村の場合は、「自然のおもてなし」が最大の売りである。ホテルに併設する「お土産売場」では、手作りのお菓子や大島紬など、「そこでしか手に入らない」物を中心に販売している。特にレストランでも販売している名物・鶏飯セットは、島外からの注文が殺到するほどの人気ぶりとのことである。

現在ホテルの開業から 30 年近くが経過したが、奥社長は「そろそろ長い目で考えて、後世に誇りを持って残せるモノを作っていきたい」と語る。その手始めの試みとして、ホテル敷地において、近隣の海水から「塩」を作り、お土産店に並べ始めた。また奄美独自の情報発信手段として、地元材料を使った土器・陶器作りにも取り組んでいる。これらに加えて、ホテル近辺の土地で体験農業等もできるような施設を作り、将来的には「ばしゃ山村」を「アイランドセラピー」の施設にしておくことが目標と言う。「全国には似たような施設も多いが、公営の施設が多い。現実味のある『生きた』ムラには、民間でやってちゃんと pay できることに意義がある」と、奥社長は語る。



「ばしゃ山」から見た奄美の海と夕陽（ホームページより）



最近では、このような奥社長の人生観、人柄に共感を覚える旅行者も多く、特に関東圏からのリピーター客が増加中とのことである。ホテルのホームページを見ると、そのような「ばしゃ山村ファン」とのメール交換が頻繁に行われており、滞在者に対するホスピタリティの高さがうかがえる。「ばしゃ山村に『入村』した方には、命の洗濯をして帰ってもらえるような場所であり続けたい」と語る奥社長の言葉は、離島振興を考える上で忘れてはならないヒントを与えてくれるように思う。

同様に、徳之島・天城町にてリゾートホテルを手がける宮田 益明社長も独自の「地域振興論」を御持ちの方である。徳之島の気候（風が強い）や土地の起伏の激しさに着眼した宮田社長は、社会人や大学の陸上競技部誘致に本格的に動いた。知人のつてをたどり、自力で全国の陸上競技部を訪問、徳之島の適地性を説いて回った。

この結果、現在は積水化学陸上部をはじめ、18社が合宿を行うまでになり、今般宿泊施設の能力増強工事も着手した。選手・コーチばかりでなく、報道関係や一般のファン等の宿泊需要も増加傾向で、地域への波及効果も大きいという。

「とにかく自ら足を運び、靴底を減らして営業をすること。何度も何度も徳之島の良さをセールスすることですよ。そうすれば必ず先方もこの島の良さを分かってくれる　これが私の持論です」

多くの陸上選手との日々のコミュニケーションの中から新たなニーズを探り出すと共に、宮田社長は独自の営業戦略を描き続けている。



2. 今後の離島振興に求められるもの(おわりに)

最後に、以下の5点を提言し、鹿児島県離島のさらなる発展を願いつつ、筆を置くこととしたい。

地産地消の推進と輸送コストの助成

離島振興のネックとなっている「コスト高」の原因の1つに、生活物資を本土から購入しているため輸送費がオンされるということが挙げられる。島でとれた農林水産物を直接島で消費せず、一旦本土に輸送されたものを購入しているという話も数多く聞く。これを改善するために積極的に「地産地消」を進めていくことが必要である。島では産出できないガソリン等については、本土-離島間の輸送費や、地元スタンドの運営経費を国や県が助成する等、本土並みのコストを実現するという思い切った施策を提案したい。

地域住民主導の「島おこし」のために行政に期待される新たな役割

「島おこし」の主役である地域住民が持つ「島の現状を何とかしたい」という熱意を引き出し、リーダー(人材)を育て、或いは「具体的な戦略」立案をサポートする……少ない予算でも住民による継続的な活動を育む、「島独自の色」を出せるような取り組みを地元市町村に期待したい。

また、「様々なハンデ」を抱える「島おこし」事業には、事業シーズのきめ細かな収集と事業機会を逃さぬ為のスピーディな決断・実行、弾力的な財政運用等、官民連携を円滑化させる努力が必要であろう。

航空運賃と観光振興

航空運賃の更なる引き下げには「公的支援の抜本的な拡充」が必要である。しかし、航空運賃の引き下げのみにより「観光振興による島おこし」は実現しないことを認識する必要がある。地域住民が「離島の宝・魅力」を探し出すことこそが観光振興の第一歩であると位置づける必要がある。また旅行代理店のネットワークや企画力、メディアを効果的に利用した離島の魅力の情報発信・PRの実践を期待したい。

新法施行にあたっての期待

島の内外で様々な意見のある新離振・奄振法の行方であるが、あえて以下の3点を提言したい。

- 1) 全額補助金方式の限界；所謂「出せばなし」「出したら終わり」方式の、施設(ハード)整備に対する補助金方式は最小限にとどめたい。また、厳しい財政下「減税」「有利な条件での債券発行」といった手法も取り入れ、資金回収の概念も持つべきであろう。
- 2) 地元の意見を十分に配慮したものに；法律を利用し、実践していくのは島民そのものである。
- 3) 金融支援体制の強化を；第1章でも触れたとおり、特に奄美群島を中心とした離島地域における金融面での支援体制がウイークであることを痛感させられる。新沖縄振興法の素案でもそうであるように、県内離島においても地域金融機関の補完機能として、奄美群島振興開発基金を中心とした政策金融機関の機能充実を図るべきである。

ホスピタリティの醸成を

言い古された言葉となるが、島を訪れた方々が「もう一度訪問してみたい」と思いたくなるような、「おもてなしの心」を大切にしたい。特に観光客の受け入れには、行政や民間部門の観光に携わっている方々ばかりでなく、島民一人一人の意識改革によるホスピタリティの醸成が必要になる。



【別紙】

なお、本レポートを執筆するに当たり、ご協力頂いたのは以下の方々である。

ヒアリング先（五十音順）

執筆分担

はじめに：鶴木 禎嗣

第 1 章：鶴木 禎嗣、増永 秀一

第 2 章：[瀬戸内]板橋 史明 [沖縄]玉越 茂

第 3 章：鶴木 禎嗣

第 4 章：[さぬき]板橋 史明 [隠岐]鶴木 禎嗣 [3 島交流会]玉越 茂

第 5 章：増永 秀一

第 6 章：板橋 史明

第 7 章：鶴木 禎嗣、玉越 茂、板橋 史明、増永 秀一